

教育における「男性」研究の視点と課題

—「男というジェンダー」の可視化—

多賀 太 (久留米大学)

1. はじめに

本発表は、英語圏の「男性」研究の成果に依拠しながら、教育において「男というジェンダー」を可視化し、「ジェンダーと教育」研究をさらに推し進めるための視点と課題を提起するものである。

教育社会学においてジェンダー概念が導入された1980年代後半以降、「ジェンダーと教育」研究の焦点は「女性」から「両性の関係性」へとシフトしてきたが、「男性」については、いまだに女性との差異において一般的・抽象的に語られるにとどまる傾向にある。しかし、教育におけるジェンダー関係の実態をより詳細に把握しようとするならば、「男性」自体に焦点を当てた研究の蓄積が不可欠である。本発表では、「男性」研究の視点を示した後、それらの視点から見えてくる「男性」の新たな側面を3つの教育領域において提起する。

2. 「男性」研究の視点

(1) 普遍性という名の男性性

教育をはじめとする「公領域」は、性的中立性を装いながらも、実は「男性化された」領域であった。そこでは、女性のみが「女子教育」のゲットーに囲い込まれたように、男性が「普遍的」モデルとみなされ、女性は性的に特殊な「二流」の存在と位置づけられてきた。しかし、公領域の主要価値である競争や勝利は「男らしさ」として定義され、男たちのあり方が公領域を形成してきた。「男性」研究の主要目的の1つは、こうして普遍性の名の下に男性支配を正当化してきた近代の隠れたメカニズムを暴き出すことである。

(2) 男性性の社会的構築

「男性」研究は、生物学的存在としての男性のみならず、男性を社会的な「男性」たらしめる社会的構築物としての男性性 (masculinity) に焦点を当てる。男性性の意味は、一方で、個々の男性の意思を超えた「社会的事実」として集合的に定義されており、個々の男性の行為やアイデンティティのあり方はそうした男性性の意味によって規制される。しかし他方で、男性性の意味は男性たちの行為のあり方にもとづいて定義されるため、個々の男性たちの行為それ自体が男性性の意味の産出と再生産に寄与する。男性は、男性性によって形成される客体であると同時に、男性性を産出する主体である。

(3) 男性性の複数性

男性のあり方は、ある時代の一つの社会の内部でも様々である。学校のような一つの組織の内部にも多様な男性性の構築が見られる。男子生徒たちの中には、男としてのアイデンティティを教育達成に求めようとする者もいれば、スポーツ活動に求めようとする者もいるし、反学校的な非行文化に求めようとする者もいる。このように、異なる「男らしさ」の定義をともなつて男性たちの間に多様性が見られるとすれば、それは男性内分化として捉えられるべきである。

(4) 男性支配の重層性

さらに、複数の男性性は必ずしも対等な資格を持って存在しているわけではなく、それらの間には往々にして序列関係が存在している。これらのうち、権威と結びつき優位な地位を持つ特殊な男らしさのパターンは「ヘゲモニックな男性性」 (hegemonic masculinity) と呼ばれる (Connell 1995)。これは、女性性だけでなく他の従属的なタイプの男性性との差異によっても定義される。男性支配の社会構造は、すべての男性がすべての女性を同じように支配するという単純な構造ではなく、特定のタイプの男性性が女性性と他のタイプの男性性を従属させることで、全体としての男性による女性支配を達成するという構造をなしている。

3. 教育達成と男性性

(1) 男性化された学力競争

従来、教育と男性性との結びつきは、女子の問題としてとらえられてきた。学校がフォーマルに語る教育・職業達成期待と「隠れたカリキュラム」を通して女子に伝わる家庭役割期待との齟齬により、女子は役割葛藤を経験し、これが女子に「地位引き下げ」効果をもたらすからである。

しかし、男性の場合、教育達成をめぐる競争が女子よりも加熱するという別の問題がある。男性は、女性のように主婦になって競争から「撤退」することはできない。こうした「男性化された」競争における失敗は、単なる失敗ではなく「男としての」失敗をも意味する。こうした競争が、男子に対して疎外感や重圧感を生み出す可能性については以前から指摘されてきたが (天野 1988)、これらを具体的に検証しようとする試みはいまの

ところ見られない。

(2) トラッキングと男性内分化

先に述べたように、女子は、職業役割と家庭役割との葛藤によって進路分化しやすいため、トラッキングによる生徒分化をジェンダーとの関連で扱った従来の研究は、ほぼ例外なく女子に焦点を当ててきた(中西 1998)。しかし、学力競争それ自体が男性化された競争であるならば、学業成績にもとづく男性の分化を男性にとっての「ジェンダー・トラック」とみなすことも可能である。

例えば、生徒下位文化の古典的研究とされる *Learning to Labour* (Willis 1977) は、男子にしか焦点が当てられてないためジェンダーの視点が欠けていると批判されてきたが、男性内分化の古典としても読める。普遍性の中に男性性を見いだそうとする視点で見れば、「野郎ども」の反学校的下位文化の形成は、フォーマルな学校文化と親和的な中産階級の男性性のヘゲモニーに対する挑戦と、代替的男性性構築の実践であると読める。

(3) 教育の女性化

男性性の意味が社会的に構築されるものである以上、社会的文脈が異なれば、教育と男性性との結びつきが全く逆転することもありうる。Willisの研究において、学業に熱心で学校の権威に従順な「耳穴っ子」たちが「野郎ども」によって女性化されていたように、学業における勤勉さを女性性と結びつけようとする下位文化は英語圏では広範に見られる(Swain 2004)。だとすれば、女子だけでなく男子も、教育達成をめぐる、学校におけるフォーマルな期待とインフォーマルな期待との間で葛藤を経験する可能性がある。

4. 学校スポーツと男性性

(1) 男性支配正当化装置としてのスポーツ

学校の主要な活動の一つである体育/スポーツは、きわめて男性化された活動であると同時に、男性支配正当化の巧妙な装置でもある。例えば、運動会の最終競技に男子リレーをもってきたり、校内マラソン大会で男子の走行距離を長くするという慣行は、男子の女子に対する優越を印象づけるのに効果的である。体育の授業や部活動を男女別に行う慣行も、男子が女子に負ける状況の発生を回避することで男性優位という「神話」を維持するための重要な制度である。

(2) スポーツと男性の疎外

このように、スポーツが男性支配正当化の主要装置であるという事実は、男子にスポーツ達成への重圧感や特有の疎外感を生み出していると考えられる。しかし、それを具体的に検証しようとする試みはごくわずかしか見られない。

5. 生徒集団と男性性

(1) ジェンダー化されたいじめ

生徒集団は、生徒たちが様々な競争を通して様々なタイプの男性性を構築する場である。ヘゲモニックな男性性が優越や支配と結びついているため、学業やスポーツなど学校が公認する活動で活躍できない男子は、しばしば生徒集団内でのいじめなどによる反社会的な方法で優越や支配を達成しようとする。

英語圏の研究では、男子集団におけるいじめには、女子集団とは異なる特有の方法が用いられる傾向が確認されている。その一つが、他の男子を貶める際に彼を「女性化」という方法である。男性支配の社会においては、男性性/女性性の二項対立は、優位/劣位、支配/服従という二項対立に対応しているため、他の男子の「女性化」は、相手を劣位に位置づける最も容易な方法の一つである。もう一つ、他の男子を貶める常套手段が、彼に対する「同性愛者」のレッテル貼りである。この方法もまた、相手の男子を「女性化された」男として男子集団内のヒエラルヒーの最下層に位置づける最も有効な戦略として機能する。イギリスでは、こうした、女性性や従属的男性性のレッテルを用いた男子集団内のいじめは、共学校よりも男子校でより顕著であるという。

(2) 校内秩序と男性支配

筆者が教師に対して行ったインタビューからは、男子生徒たちが、こうした男子集団内の「力」関係に敏感に反応して学校生活を送っている様子がうかがえる。また、例えば、生徒指導主事は「力の強い」男子生徒を制圧できる「力の強い」男性教師である場合が多いように、こうした「力」による統制は、教師たちによっても積極的に用いられている。さらに、インタビューからは、教師たちが、校内秩序維持のために、生徒間の「力」による序列関係を解消させるところか、むしろそれを積極的に利用している事例も確認された。

手に負えない暴力的な男子生徒を数多く抱えている学校側にしてみれば、「力の強い」男性教師による権威主義的な方法で学校内の秩序維持をはかるのは仕方ないことなのかもしれない。しかし、そうしたやり方は、「男らしさ」と「力」との結びつきをより強め、学校内の男性支配をより強固なものとする一方で、結果的に女性教師や女子生徒の地位は低めることにつながる。

6. おわりに

本発表で提起された論点は、あくまで仮説の域を出ないものであるが、これらをもとに実証研究を積み重ねていくことが、日本の教育におけるジェンダー関係の実態のより詳細な把握につながると思われる。